

2017年度漢文夏期集中コース報告

大 竹 弘 子

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは、本年度、40週間の年間コースとは独立して3週間の漢文夏期集中コース（以下漢文コース）を設置し、2017年6月23日（金）より7月13日（木）まで実施した。

漢文は年間コースでも、プログラム後期において「選択C」として週1回100分の授業を実施している。しかし、年間プログラムには参加できないが、研究上、漢文読解を必要としている大学院生、研究者等が想定されることから、日本人が書いた漢文を中心に、漢文の基本構造習得・読解に集中したコースを設けている。

2 漢文コースの目的と特徴

このコースは、対象として、主に一次資料として漢文を読むことが必要な歴史学、文学、人類学、宗教研究、美術史等の分野の大学院生、研究者を想定している。漢文読解の必要はあっても、漢文基礎の学習機会が少ないことから、基礎となる構文、旧漢字、漢文訓読体、候文などを集中的に学習し、その構造知識をもとに実際の文章を読み、和製漢文の文体・特徴に慣れ、以後の研究に資することを目的としている。

受講者には次の要件を満たすよう求めている。

1. 漢文読解能力を必要とする専門的または学術的分野への従事を目指していること
2. 上級レベルの日本語能力、および文語文法の知識を有すること
3. 日本語の基礎的文法・文型を十分に理解し、ひらがな、カタカナに加え、漢字約1000字以上の読み書きを既に習得していること

3 受講生の構成

今年度は博士課程に在籍する五名の大学院生、秋から博士課程に進学する一名の計六名が受講した。専門分野は和漢比較文学、都市文化論、近代文学、歴史学及び仏教美術で、研究において、漢文あるいは漢文調で書かれた一次資料の読解・理解を必要としている。研究対象、及び、読むべき一次資料はある程度固まっており、漢文の知識に関しては初歩的知識を有する受講生、全く知識のない受講生が混在していた。

4 教育活動の詳細

4-1 授業の枠組み

第一日目、オリエンテーションでは、受講生の専門分野、漢文に関する知識を把握するとともに、このコースで扱う「漢文」とはどのようなものか、漢文訓読の際にはどのような提示法が用いられているかを説明した。

以降、毎日の時間割は、50分授業4コマの構成で、うち2コマを午前10時00分から午前11時50分までの間に行い、昼休みを挟んで2コマを午後1時30分から3時20分に行なった。

午前の2コマは第三週前半まで、漢文の構文構造を中心に、単純なものから複雑なものへの積み上げとともに多数の例文を自力で読み解いていく練習を重ねた。今年度は受講生の漢字知識、日本語知識に多少差があったことから、構造を説明する例文は返り点・送り仮名付きで提示し、練習文は、白文の形で提示したものを中心に、返り点のみ付したものを織り交ぜて用いた。こうすることで、説明例文で得た知識を白文に応用していく力を付けた。

午後はまとまった文章の読解が中心で、第一週目は近代の文章を取り上げ、漢文訓読体、旧漢字に慣れることを目指した。二週目は、『日本外史』『論語』などからまとまった内容のある短い文章を選び、返り点、送り仮名を付けた形で、文脈のある文章の読解を行った。

午前の第三週後半は今年度の受講生の希望に添った形で漢詩を取り上げ、中国漢詩・日本漢詩の読解を行い、最終日には、完全な白文の文章を自力で読み解いていくことに挑戦した。第三週午後は、様々な文体・内容の漢文に触れておくことを目指し、受講生の選んだ研究資料から一部分を選び、全員で読解を試みた。取り上げたのは、「昭和十四年三月十五日付官報」、石浦居士著『日本人民固有ノ性質』より第九節、寺島良安著『和漢三歳図会』より「外夷人物」、北村季吟著『和漢朗詠集註巻第一』より「序文」、『東大寺続要録』より「東大寺勸進上人重源敬白」、『漂流奇談集成』より「松栄丸唐国漂流記」部分である。

4-2 授業の実例

ここでは、より具体的なクラス活動について述べる。

午前の構造中心のクラスでは、まずその日の学習項目である構文を、典型的な例文を用いながら説明する。次に用意した短い例文（大体15から25文）を練習文として提示する。

受講生は各自自分で例文を読み解いてみる。例文にはその日の学習項目だけでなく、既習の構文、漢字のやや例外的な読み・用法（標準的な漢字辞典には含まれているもの）、語彙・表現的な要素、慣用的な語法などが含まれている。受講生は練習文を既習の構文構

造をもとに解析し、辞書を引きながら意味を取っていく。分からない漢字、語彙、表現についてはもちろん辞書を引くのだが、自分が既に知っている漢字でも、現代語の読み・語彙・意味ではなく、いわゆる漢文訓読体で用いられる、読み・語彙・意味を適切に選ぶよう指導する。また、この過程で、辞書にどのような情報があるか、どんな種類の辞書、データベースがあるかなど、実際に資料を読み解く上で必要になるであろう「調べる手段」についても知識を得る。例年、受講生は電子辞書その他の電子的デバイスの漢字辞書、国語辞書等を用いて調べるが、どの辞書のどこの部分にどのような情報があるかという知識が足りず、辞書の機能を十分に活用することができていない。第一週目は、特に、辞書を引くと得られる様々な要素を示し、経験させることで、「辞書はどう情報を分類しているか」「辞書のどこに求めている情報があるか」「ある特定の情報が欲しい時にはどの辞書が適当か」「電子的デバイスをどう効率的に使うか」という技術的な訓練も兼ねている。

さらに、練習文は短い文ではあるが、用いられている漢字あるいは語彙の文脈からの意味判断、話題の背景からの推測などを通じて、文の構成要素の意味関係を推測していくという練習にもなっている。構造説明の部分は返り点・送り仮名付きの文で、練習文は主に白文の形で文を提示することで、どの漢字が解読の鍵となるか、どの漢字の組み合わせが語彙として成立しているかを全員で探りながら練習を進めた。

午後はよりまとまった量の文章を取り上げて読み、意味を取るという作業を行う。著者、題名、歴史的背景などの情報を得てから実際に読み進めるが、まず、構文知識などを応用しながら、文章をまとまった意味の固まりに分節化していき、どの漢字が語彙としてのまとまりを構成しているかを判断する。次に辞書を引き、その中から適切な情報を選択する。そしてその情報を意味が取れるよう繋げていき、文脈にあった意味関係を作り解釈する。この過程の中の全ての段階で、受講生同士の意見交換、また教師と受講生間の意見交換が行われ、何を手がかりにし、どのように調べていけば妥当な解釈にたどり着けるかを模索する。このような作業を繰り返すことによって、実際の資料を読み進める時に必要な技能の習得を目指している。

5 おわりに

今年度は六名の受講生の間やや日本語力・背景知識の差が見られた。そのため、練習文の解読速度に差が付いたが、意欲は高く、漢文構造を扱う練習文は、ほぼ「白文」の形で提示することが可能であった。その結果、構造上の手がかりを探っていくという練習も十分に行え、それぞれの資料解読においてもその知識が有効に機能していたと思われる。また、最終日の「白文を自力で読み解く」という挑戦も速度の差はあったが、各々読み進めることができた。コース終了後実施したアンケートでは、コース期間を少し延長できないかという希望は見られたが、全員が短期間にもかかわらず、「基本を確実に身につけた」

という実感を持てたようである。

(おおたけ ひろこ／2017年度漢文夏期集中コース主任)